30amG-113

データで見る薬学生の本音「薬局実習編」

○松崎　哲郎[1], 中島　大理[1], 高橋　未来[1], 浅川　裕香子[1], 市村　丈典[1], 田中　章友[1], 小谷　洋平[1], 池澤　一廣[2], 上田　昌文[2], 横山　雅俊[2]（[1]日本薬学生連盟, [2]NPO法人市民科学研究室）

【目的】現行の薬学部6年制カリキュラムでは、5年次に薬局実務実習（以下「薬局実習」）が行われている。これは、臨床で活躍できる薬剤師を育てる本カリキュラムにおいて、非常に重要な部位を占めている。しかし、薬局実習は今年度でまだ 3 年目であり、様々な問題点が報告されている。問題点を把握するための学生を対象としたアンケートは一部で行われているが、その多くは大学教員又は薬剤師が作成したものであり、学生の意見が十分に反映出来ていない可能性がある。そこで我々は、学生の率直な意見を調査し、今後より良い薬局実習につなげるために、質問内容の作成から解析まで学生を中心に「薬局実習」に関するアンケート調査を行った。

【方法】インターネットによるアンケート調査を薬局実習修了生（現 5, 6 年生）に対して行い、12年9月10日～13年2月28日の期間にて回答を集め、解析した。

【結果】2012年11月25日時点（77名）では、指導薬剤師に関する項目に関してはどの設問においても肯定的な回答が約 7 割を占めていた。実習環境（処理した処方箋枚数や実習時間など）に対しては、約 3 割の学生しか適切と答えていなかった。配属先決定の方法（時期や場所）に関する項目では、否定的な回答が約3割を占めていた。自由記述においては、約 3 割の学生が配属先による実習内容のバラツキに関する記述をしていた。

【考察】指導薬剤師に対する学生の満足度は高いが、実習環境はニーズからずれている事がわかった。実習先の決定に際し、より学生の意見を反映できるようにすることは、ニーズの不一致の改善に加え、配属方法に関する不満が解消でき、より良い薬局実習へつながると考えられる。